

都市大阪における呪祭

——住吉大社と四天王寺の民間信仰を通して——

野堀正雄

はじめに

一、『初篇』と「二篇録目」について

二、住吉大社と四天王寺

(1) 住吉大社の概略

(2) 四天王寺の概略

三、住吉大社と呪祭

(1) 住吉御湯参詣の事

(2) 同神馬齧除の事

(3) 同神宮寺五大力信心の事

(4) 同大歳社参詣の事

(5) 同誕生石安産の事

(6) 住吉の社へ忝を植る立願の事

(7) 住吉東ノ社こま犬立願の事

(8) 同痘瘡立願の事

(9) 同種かし稲荷の事

(10) 同おもとの社楊枝の事

(11) 同祭禮桔梗の花笠の事

四、四天王寺と呪祭

(1) 四天王寺太子堂立願の事

(2) 紙子佛立願の事・同頭痛立願の事

(3) 同妙正大明神立願の事

(4) 同石神立願の事・同牛の宮立願の事

(5) 同齒神立願の事

(6) 同庚申堂参詣の事・同境内九頭龍權現の事・同頭痛除の事

(7) 同西大門布袋像の事

(8) 天王寺勝曼院立願の事

(9) 勝曼院連葉の忝の事

(10) 同薬師堂安産立願の事

(11) 同文珠堂立願の事

(12) 同引導鐘の事

(13) 同七月千日参りの事

おわりに

① 乳のオンバサン

② 太子堂の針

③ 椎寺薬師堂

はじめに

はじめに
大阪における民間信仰をみていく場合、最も大阪の人々から親しまれた社寺について論及していくのが適切かと考えられる。その場合、単に現在の信仰のみを取り上げるのではなく、過去における信仰及び

その変遷・変質等をも考察することによって、よりその内容の把握が確かなものになると考える。

さらに、対象地域を「大阪」と限定をしたが、その対象となるカミ・ホトケも枚挙にいとまがない。そこで「大阪の呪祭」を最も端的に示している『神社願懸重寶記初篇』（以下『初篇』と略す）及び「神佛靈驗記圖會二篇目録」（以下「二篇目録」と略す）を素材として、

前記の視点を鑑み、住吉大社と四天王寺について論及していくことにする。

一、『初篇』と『二篇目録』について

歌舞伎狂言作者の濱松歌國（一七七六―一八二七）は、『撰陽落穂集』（文化五年＝一八〇八序）、『撰陽奇観』（文化・文政頃）の著者として知られ、近世大坂の地理・歴史、故事来歴等に精通した人物である。

江戸において、同じく歌舞伎狂言作者である二世並木五瓶（萬壽亭正二）が、『願懸重寶記』（文化十一年＝一八一四）を著したのを受け、文化十三年（一八一六）に、大坂及び大坂周辺の社寺等の御利益・願掛けの方法・お礼参りの仕方などを詳細に記した『初篇』を著した。

これら二つの「重宝記」は、ともに当時の一大ベストセラーとなり、続編や他地域版も計画された。⁽¹⁾これは、書名そのものに「初篇」という言葉を使っているところからも推察される。この『初篇』は『神佛靈驗記圖會』（文政七年＝一八二四）として書名を変えて再板されている（『初篇』と同板）。この書に、「二篇目録」として八二項目（ただし一項目のみ欠）を掲載し、「近日日本出」を「二篇目録」の下部にさらに奥付には「近日うりいだし候」と記されている。板行されたかどうかは不明であるが、恐らく板行されなかったと思われる。

『初篇』には六九項目が掲載されているが、その御利益の内容をま

表1 御利益の内容

凍	風	1	泡	瘡	10
	瘡	2	諸	病	6
	痛	1	諸	願	8
月	代	1	厄	除	5
中	風	1	齒	痛	6
火災・盗難除		1	痔	疾(五痔)	5
子授・避妊		1	安	産	5
裁縫上達		1	開運・福德		3
齒ざしり		1	下の病		3
積	聚	1	頭	痛	3
狐	つき	1	梅	毒	1
小児の病氣		2	足の病		2
腫	物	1	授	乳	2
複数にまたがる場合は全て数に入れた。お礼、加持・祈禱の場合も数えて列挙した。			眼	病	1
			労	痰	1
			酒	断	1
			難	病	1

とめると表1Ⅰとなる。この『初篇』及び『二篇目録』を合せれば、近世大坂における庶民信仰の実態がより鮮明になるが、『二篇目録』はその言葉通りの目録だけの表記のため、その再現にはかなりの努力が必要である。⁽²⁾

二、住吉大社と四天王寺

(1) 住吉大社の概略

住吉大社は上町台地の南端（大阪市住吉区二丁目）に鎮座し、いわゆる住吉三神（表筒男命・中筒男命・底筒男命）と神功皇后との四神

二、住吉大社と四天王寺

表2 最近10年正月三箇日
参拝者数

昭和57年	289万人
〃 58年	294万人
〃 59年	285万人
〃 60年	286万人
〃 61年	285万人
〃 62年	283万人
〃 63年	289万人
〃 64年	285万人
平成2年	291万人
〃 3年	283万人

(警察庁発表)

を祭神とする。また、この他境内及び境外に数多くの摂社・末社がある(図1参照)。

大阪の人々から「住吉さん」と親しみを込めた呼び方をされ、正月三箇日の参拝者は二八〇万人を越えている(表2)。

古来より海上安全守護の神として信仰された。奈良時代、遣唐使遣の際には、必ず航海無事の奉幣祈願がなされた。また、江戸時代には東廻り・西廻り航路等の内海航路の発達にともない、海運業者や漁師の信仰を集めた。このことは、西廻り航路に沿った各地の神社に奉納されている多くの舟才船・北前船などを描いた船絵馬⁽³⁾や、住吉大社境内に所狭しと奉納された六〇〇余基の石灯籠からもうかがい知ることができる。

一方、平安時代から住吉明神は歌神としても信仰を集め、和歌三神の一つに数えられた。その関係で、藤原道長・藤原頼通・後鳥羽上皇・藤原定家をはじめとし、二条家・六条家も住吉詣を行った。

そして、数多くの歌会や歌合が催され、歌集や日記・歌物語等に住



写真1 住吉神画像(大阪市立美術館蔵)

吉の名称が記されもした。単に名称だけではなく、『伊勢物語』や『源氏物語』には住吉明神と和歌の結びつきも記述されている。

さらに和歌だけではなく、俳諧・紀行文・狂歌などの庶民文学の神としても信仰されるようになった。これは、松尾芭蕉の住吉詣でや、井原西鶴の住吉神前における大矢数の奉納に代表されるであろう。そして、三都の書林仲間によって土蔵(御文庫)が寄附され、多くの献書もなされた。

また、住吉明神は古くから現形する神としても知られ、数多くの歌文に「住吉のあら人神」と記された。そしてまた、『住吉大社神代記』には灌漑用水の神、『播磨国風土記』には苗代を作る方法を教えた神

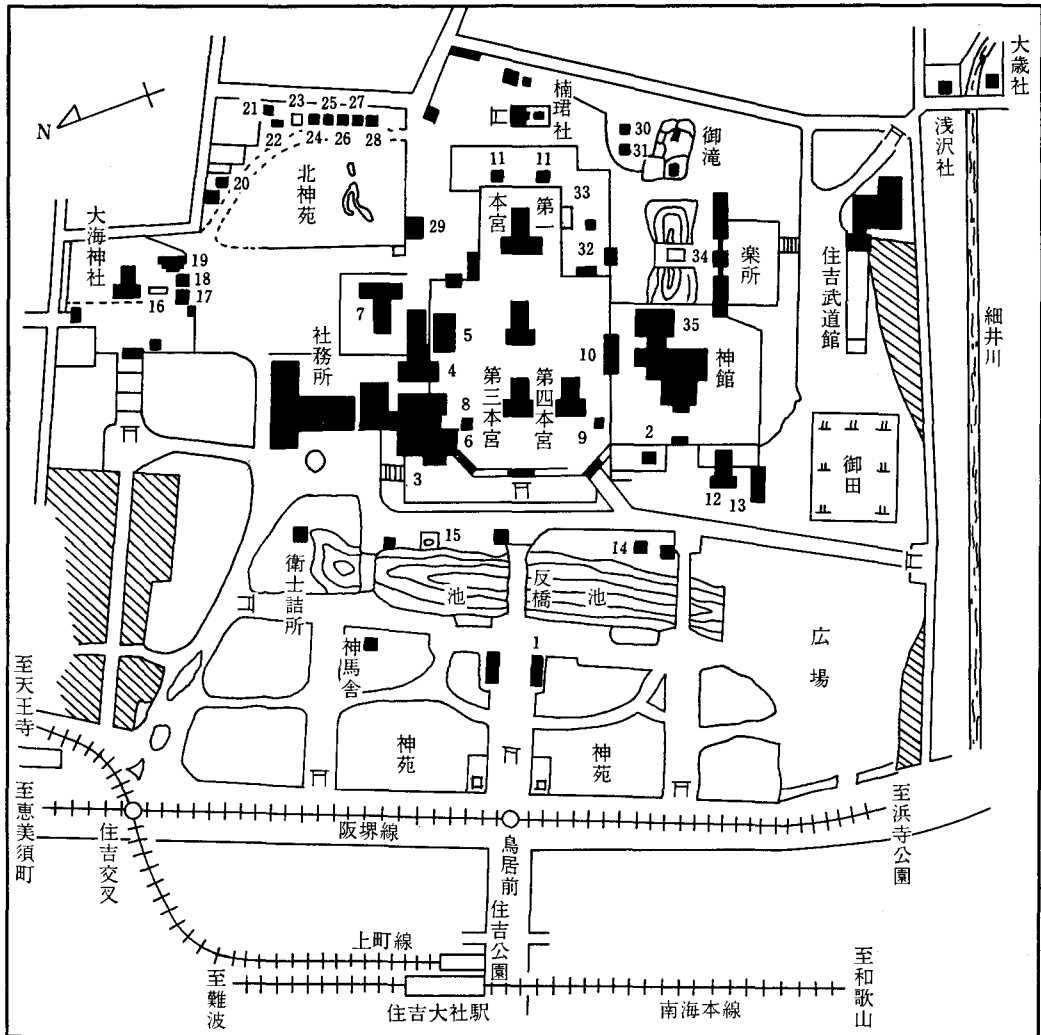


図1 住吉大社境内略図

略図凡例

- 1 絵馬殿 2 船玉神社 3 祈禱殿 4 神楽殿 5 祓殿 6 祈禱受付所 7 住吉文華館
 8 鈴社 9 桶社 10 侍者社 11 高車 12 市戎大国社 13 五月殿 14 龍社
 15 誕生石 16 志賀神社 17 海士子社 18 児安社 19 種貸社 20 星宮 21 后土社
 22 五社 23 招魂社 24 薄墨社 25 斯主社 26 今主社 27 八所社 28 新宮社
 29 御文庫 30 貴船社 31 立聞社 32 若宮八幡宮 33 五所御前 34 石舞台 35 斎館

という記述がみられること、松苗と緞を持った姿を描いた「住吉明神画像」(大阪市立美術館蔵、写真1)、六月十四日に営まれる御田植神事は言うには及ばず、農耕神としての信仰をも集めていたことが理解できる。

(2) 四天王寺の概略

大阪市天王寺区四天王寺一丁目に位置し、荒陵山敬田院と号する。

また、「天王寺さん」と呼び親しまれ、数ある大阪の寺院の代表的存在で、一月十四日に営まれる〴〵どやどや〴〵や春秋の彼岸における〴〵天王寺参り〴〵、八月九〴〵十日の千日参り(千日詣でとも称する)には、多くの参拝者で境内はにぎわう。もと天台宗に属していたが、現在は和宗総本山で、本尊は救世観世音菩薩である。

聖徳太子の戦勝祈願によって建立されたといわれ、伽藍は中門・五重塔・金堂・講堂が一直線に配されている、いわゆる四天王寺方式である。たびたび罹災したが、その都度復興を重ねた。

平安時代末期、末法思想に基づく浄土信仰の華やかし頃、日想観の適地であったため、「西門は極楽浄土の東門に通じる」とされ、住吉詣で・熊野詣でとともに四天王寺詣でが隆盛をみるようになり、法皇・貴族のみならず、貴賤を問わず、日想観を修する霊場となった。それにともない門前町も発達した。また、極楽浄土を願って難波の海(住吉の浜から)へ入水する者もあった。

鎌倉時代には、親鸞や日蓮などの高僧もこの四天王寺で日想観を修め、眼を開いて各自の宗を唱えた。鎌倉後期には太子信仰が復活して、忍性らの活動も伝えられている。また、南北朝の頃には、『太平記』に楠木正成が四天王寺を信仰したことが記されている。

元和元年(一六一五)の大坂夏の陣で、四天王寺は烏有に帰したが、のち元和四年に復興した。その後、享和元年(一八〇一)に雷火より罹災。この時、再興に尽力したのが民間人の紙屑商淡路屋太郎兵衛であり、この際のエピソードも残されている。この再興時期と相前後して、四天王寺に対する信仰——彼岸参りや千日参り等——が庶民層に浸透するようになった。

また、四天王寺舞楽は日本古典芸能の中でも著名なもので、四月二十二日の聖霊会舞楽はオシヨウライと称して親しまれ、季節の変り目の挨拶として「寒さの果てのおしょうらい」と使われている。

三、住吉大社と呪祭

『初篇』には五例、同じく『二篇』には六例が記載されている。これらを中心にして、みていくことにする。

(1) 住吉御湯参詣の事

住吉大明神の神輿は毎年六月十三日前の濱にてすすき洗ふ是を神輿あらひと御湯ともいふ這日ハ前の海うしほ湯と成て恰も涌す

か如く也參詣諸人濱に行て浴なしひえ一切の病平愈なすといひ傳ふ

同じ濱松歌國の手による『摂陽見聞筆拍子』（文化九年＝一八一二頃成立）には

住吉大明神の神輿を、六月十三日前のはまにてすゝぎ洗ふ、是を神輿あらひともお湯ともいふ、其日は前の海うしほ湯と成て、あだかも涌がごとく也、諸人此日詣ふで、はまに行ゆあみする事あり、ひへ一切の病人多く入るに、病平愈するといふ、当然のことながら同様の記述がみえる。

住吉大社の夏祭は一般に住吉祭と称されている。神事の日程・構成（現行）は、七月十五、六日の神輿洗神事、同月三十日の宵宮祭、同月三十一日の例大祭及び夏越祓神事、八月一日の渡御祭及び荒和大祓神事からなる。この御輿洗神事を示して、夏祭に用いる神輿を長峽の浦において、舟で海水を汲んで祓い清められる。

日付が「十三日」となっているのは、祭礼の前日である十三日から人々が群集するためだと考えられる。このことは『摂津名所図会』（秋里籬島著、寛政八年＝一七九六）の次の記述からも理解できる。

六月十四日潮湯。此日近世より諸人社頭に群参し、住吉浦の潮水に浴し、百病平癒を禱るに靈驗炳然し。土人曰く、これを御祓の御輿洗といふ。又諺に云く、此日熊野本宮の温泉こゝに湧出るとぞ。凡十三日より十五日に至りて群集する事、汐干・御祓の如し。

（中略）此浦の潮湯、時節の太陽熾にして、海濱に徹し潮水を熱



図2 お湯（『摂津名所図会』より）

す。故に萬病これに觸れば、忽陽氣肌膚にめぐりて平癒す。殊に身體疼痛・虚寒・厥冷の性に功驗あり（後略、図2参照）。

この『撰津名所図会』では、冷え症以外に、疼痛にも効果があると述べている。

泉州沿岸地域では、この日、住吉の御輿を洗うために、遠く熊野から潮流がやってくるという伝承がある。これを御湯（オユ）あるいは泥湯とも称する。そして、このオユの帰りをモドリユといい、これで足を洗うと一年中病気をしないと伝える。また、高石市の高石神社では、同日、御湯祭りと称して、住吉大社同様に神輿を洗う神事が執り行われる。

一方、『浪花十二月書譜』（狂言堂春や織月著、嘉永二年（一八四九））には、

住吉泥湯 六月十四日攝州住吉浦におゐて汐をのれと涌上るを諸病を除くの呪とて人くんじゆして此汐を浴る事をびたゝし一説に住よしの神輿をそゝぎしあとかくのごとしといふ

と記され、住吉の神輿を洗った海水だから効驗があると解釈しているようなイメージを強く受ける。しかし本来的には、六月十四日は満月の日で、全国的に川祭りを行う日であって（カワは井戸や泉などを含み、単に水の流れる流れ川だけに限定しない）、水の神を祭り半年間のケガレを禊祓をする日である。京都の有名な祇園祭りも山鉦巡行に先立って行われる神輿洗いに、夏祭りの本来的な意義をみることができ。各土地土地で行われていたと思われる川祭りにおける禊祓も、

長い歴史の営みのなかで、近在の住吉大社の神輿洗い神事が有名になり、クローズアップされてくるにともない、各土地における川祭りの禊祓の行事が忘れ去られ、オユがさらに有名となっていたものと考えられることができる。

(2) 同神馬齧除の事

住吉大明神の神馬ハ平日に本社側に齧をする人此馬の飼料の白豆を三粒受かへりて喰へば其夜より齧をなす事なし

『住吉名所鑑』（田寺如柳著、享保二年（一七一七））の挿図や「撰州住吉社細見繪圖」（天明（一七八〇）代前後頃刊行か）によると、神馬舎は第一本宮の南の方にあつたことがわかる。そしてその後の『撰津名所図会大成』（暁鐘成著、安政期（一八五四〜六〇頃成立）によると、「一の神殿（第一本宮）の北の傍ニあり」と移動したことがわかる。文化年間には第一本宮の南北のどちらにあつたかは不明である。さらに、同書には、

同村〔北田辺村〕ニありいにしへより住吉の神役をつとむ則ち白の神馬を毎朝住吉へ牽ゆき神馬舎につなぎて守護し毎夕つかへりて當村において養ふ（後略）。

この北田辺村で神馬を飼うことは戦後しばらくまで続いていた。その役は橋氏が代々行うことになっていた。神馬が往復する道は一定しており、とりわけ南海上町線帝塚山四丁目駅の東の道は、今も「白馬街道」と称されている。

はぎしりの呪いである豆は、現在も神馬舎で頒布されており、時折買い求める人があるという。就寝前に豆を三粒食するとよいという。

(3) 同神宮寺五大力信心の事

住吉神宮寺の五大力菩薩の眞像ハ忝なくも住吉明神の御筆なれば信心なし奉らずんば有べからず廻船渡海の荷物に五大力と三字書たる提札をつけ置に其荷物船ともに凶事ありし事を見聞せず

神宮寺は新羅寺と称し、天台宗東叡山に属し、天平宝字二年（七五八）、孝謙天皇によって建立されたといわれ、本尊は薬師如来像であった。本社北側、大海神社との間にあり、本堂のほか、法華三昧堂・法華常行堂・大日堂・東塔・西塔・寶藏など仏堂八宇・僧房十余があったといわれる（図3参照）。

五大力像は住吉明神が松の葉で描いたと伝え、神宮寺境内北東隅にあった校倉造の寶藏にあった。明治維新後、神仏分離令により神宮寺は廃寺となったが、護摩堂だけが現在も残り招魂社として用いられている。

「五大力菩薩像」五幅は高野山普賢院にあり、国の重要文化財に指定されている。また、いつごろから安置されたかは不明であるが、五大力の仏像もある。こちらの方は同じ天台宗ということで、近くにある松野山地蔵寺（住吉区墨江一丁目）で祀られるようになった。現在でもこの五大力の五体の仏像（秘仏）及び板木などが伝わっている。

ここで考えなければならないことは、五大力と航海安全がなぜ結び

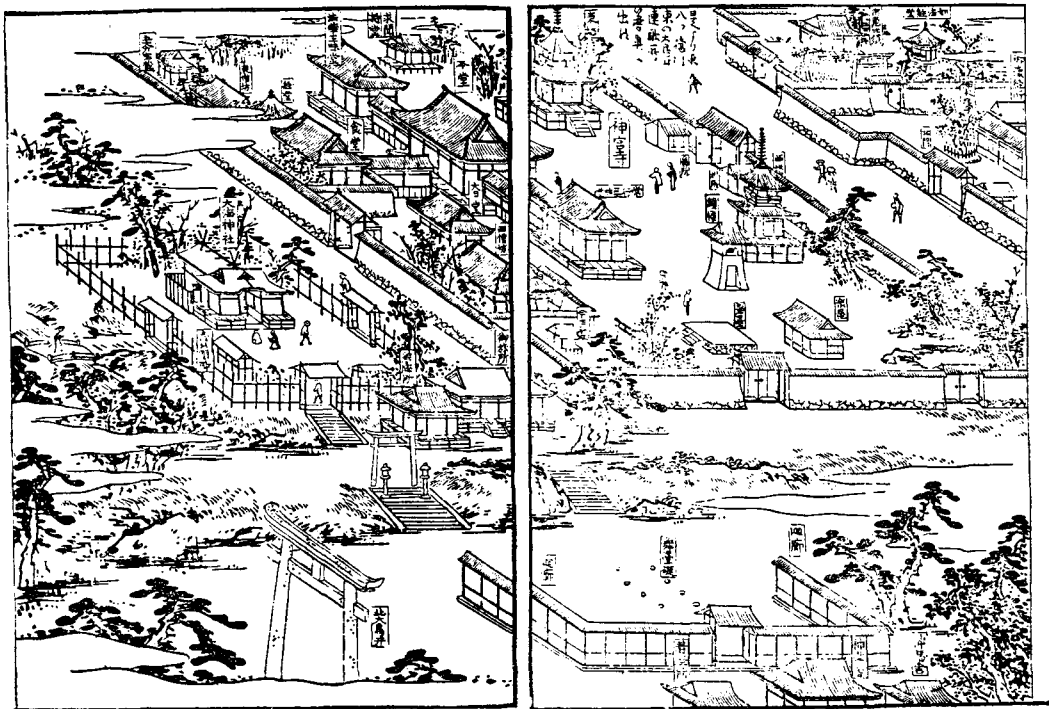


図3 神宮寺全景（『住吉名勝図会』より）

つくようになったかである。

江戸時代、関東周辺で「五大力」と称する小廻しの廻船があった。廻船と瀬取船の両方の機能を有する船で、十七世紀末には上方へ江戸間を航行した二〇〇石積級の船である。石井謙治氏は、関西における五大力（船）の史料は『船法御定並諸方聞書』を唯一知るだけであるとし、大坂の舟大工であった『和漢船用集』の著者が、同書に五大力の名称を書きもたすはずがないと考え、元禄頃では五大力と呼ばれていた弁才船が、ベザイ船の呼称に定まり、十八世紀中葉の上方では、五大力の名を忘れられたからだと推定している⁽⁵⁾。

つまり、上方では五大力と弁才船を同じ扱いをしていた。このために名称が同じである（船の五大力という名称は、仏像の五大力という名称に由来する）。さらに、海上守護の神として信仰を集めている住吉大社の神宮寺であるところから、航海安全、船荷無事の信仰が生まれたと考えられる。

五大力に対する信仰は、神宮寺廃寺後絶えるが、その後、新たな信仰として再生され、受けつがれていく。その信仰が、現在行われている「五所御前」及び大歳社の石の信仰である。五所御前の玉垣の中の小石に、「五」「大」「力」あるいは「五大力」と書かれたものを見つけ、家へ持ち帰って神棚に祭る。祈願が叶うと別の小石に同様の文字を書いて返納する。元は「五」の文字だけであったという。今日では、初辰さんの日に神職によって書かれた小石が玉垣内に入れられる。朝早くから参拝する人達が真剣になって、文字の書かれた小石を探し

ている。

一方、大歳社の方でも、初辰さんの日に月参りに来る人達で賑わう。商売繁昌、家内安全等の祈願をする参拝者に対して、祈祷した「大」の字を書いた小石を祈願の印としていただき、月参りのお守りにすることが行われている。

(4) 同大歳社参詣の事

大歳の社へ住吉四社の本殿の南淺澤の末野中にありといへども諸人よく知りて月参する輩多し此神に立願すれば商人職人節季毎に賣懸滞なく請取損銀なしといひ傳へ信心の輩少からず

商都大坂らしい信仰の内容である。大歳社は^{おとしのかみ}大歳神を祭神とし、農業神、稲の収穫の守護神である。商人にとって、農業の収穫に相当することは、資本の回収、売掛金の回収である。また、「大歳」という音韻の連想から年末の大歳をイメージし、節季、節季払いに結びつけ、売掛金の回収＝集金の神、さらに、集金順調は商売順調に結びつき、商売繁昌の信仰が生まれたものと考えられる。

同様のことが『摂津名所図会大成』に

右安立町の北はしより東一町あまりニあり延喜式云

草津大歳神社とハ是なり祭神素盞鳴尊の御子大歳神なり五穀神とす近來浪花の商賈この神をいのれバ金銀取引の契約に異變なく節季毎に賣懸の金錢速にあつまとて詣人平日に閒斷なし其由緒つまびらかならずといへども神ハ尊敬より靈應あらたにして信あ

るを以て徳を益然れバ詣して信仰せバ幸ひを得ること疑ひ有べからず

と記されている。

歌國の『撰陽見聞筆拍子』には

第十四社は大歳の神とて、最初天照太神とその内ゐんより、此界に下るべし、我住べき所や有、委敷見て参るべしと、御使にくだし給ふ處に、此神地景の面白に愛で給ひて、長居して歸る事を告させ給はざりしによつて、天照太神待ちかねさせ給ひて、天くだり給ふ、のび／＼におはしますによりて、長岡の峯を追いだされ、淺澤の流れの末ひがたの東、住よしのみなみにおはします、是によつて此所を長居の浦といふ、大歳の神社は諸人よく知りて、月参するともがらも多く、此神に立願すれば、商人職かた節季毎の賣かけ銀、よく取るゝといひ傳ふ（後略）。

と、長居の地名伝説とともに集金の神としての大歳社を、京都市右京区嵯峨朝日町に鎮座する車折神社とともに、紹介している。

(5) 同誕生石安産の事

住吉誕生石のかたはらの小石三ツ拾ひ歸り懷胎の婦人信心すれば安産して母子ともに凶事なし御禮にハ拾ひ歸りし小石に添て随分清浄なる土地の小石を三ツ拾ひて以前の石と共に誕生石のかたハらへ納むべし

歌國は『筆拍子』では単に「誕生石に小石をさゝげて安産をいの

る」とだけの説明で終っている。

建久元年（一一九〇）の春、丹後の局が社頭で産気づき、大石によりかかつて、薩摩の国主島津忠久を安産したという古伝（図4参照）がある。

△図4▽や△図5▽の誕生石の位置と現在地を比較すると、前者の位置と多少のずれがみられる。いつの頃か移動させられたものだろうか。

誕生石のそばの小石三個を拾って歸り、安産の祈願をすればよいという。お礼には、先程の小石に清浄な場所の小石を三個添えて、誕生石のそばに返納する。しかし、この習俗は大正年間には廃れ（誕生石の周囲には小石が見られない）、現在は、小絵馬等を本社に奉納して



図4 誕生石（『住吉名勝図会』より）

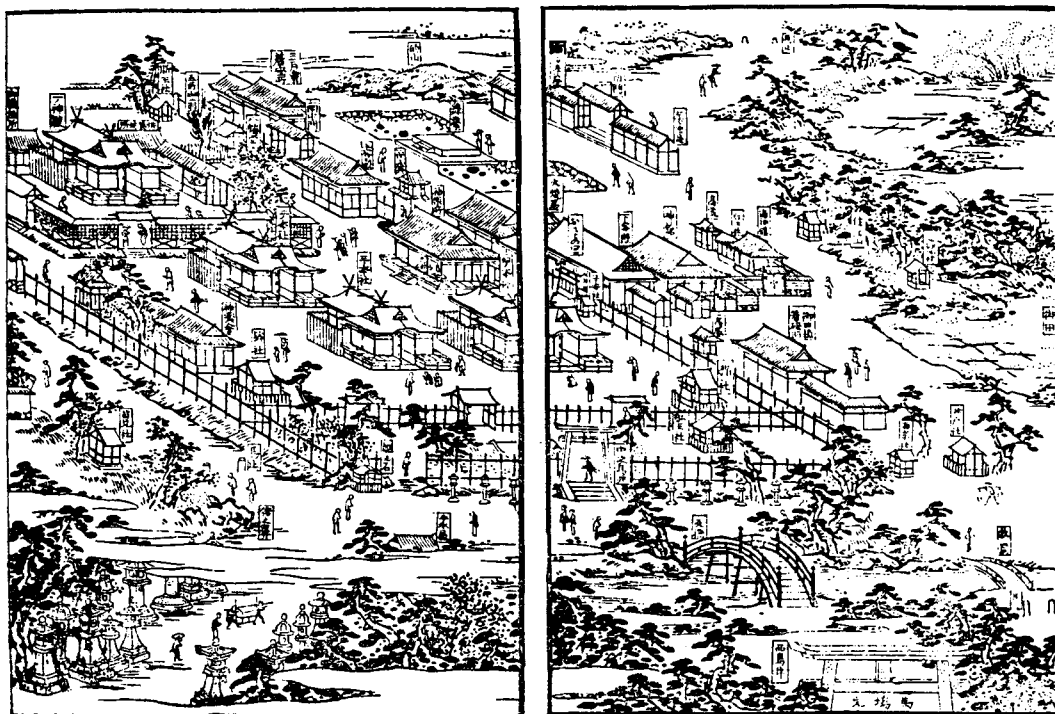


図5 住吉大社全景（『住吉名勝図会』より）

祈願するか、誕生石に単に祈願するのみとなっている。

この事例のように奉納された奉納物を借り受けて祈願をする場合、お礼参りの際に、借り受けた奉納物に新たな奉納物添えて、倍にして返納するのが一般的な作法である。

(6) 住吉の社へ杵を植る立願の事

「住吉大社」と「松」は切っても切れない仲で、歌枕としても有名な。この住吉大社の象徴ともいえるべき松を植えることによって、何らかの祈願がなされたものと思われるが、詳細は不明である。天明年間（一七八〇～七八）の頃、住吉大社の松が枯死しかけたため、俳人加部仲ぬりの妻吉女が大伴大江丸といっしょに、風流人に松苗の献木を斡旋した。さらに、松苗の植主の一首一句の献詠をうけて、『松苗集』（全二三冊）をつくって奉納をした。以後、松苗の献木が行事化し、松苗神事として今日に伝えられているが、この松苗神事（現行四月三日）と何らかの関連があるかも知れない。

『撰津名所図会大成』（晩鐘成著、安政期（一八五四～六〇））において住吉の松に関する記事として

當社神木の中に於て松を第一と賞する事ハ人皇十代崇神天皇の御時三神高天原より天降り給ひ墨江浦に影向の砌三本の松忽然として一夜に生ず是即大神影向の瑞木にして永く住吉に鎮坐し給ふ先表なり其時天皇使を墨江に遣わして其靈瑞を見せしめ此に祭り給ふ是より其松に木綿をかけ注連繩を引事ハ此由縁にして今影向

石といへるハ其古蹟也と言傳ふされバ住江松林下久送ニ風霜一トハこれなりと住吉勘文に見えたり自爾已來あるひハ和哥に詠し或ハ詩に賦し松を賞讃せずといふ事なし故に古今の序にも高砂住のえの松も相おひのやうに覺ゆと書れたり（中略）一説ニ住吉の忘草といへること種々の説ありといへどもたしかならず然るに人王百五代靈元院太上天皇詔りありて住吉の忘草献上いたすべきよしおふせありしかバ此事ハいにしへより神祕にしてあからさまに他に出せしことあらずといへとも 勅命もだしがたく早速白木の臺にのせ箱におさめて他見なきやうと言上奉り献上しけれバ 帝紫宸殿において覧覽まし／＼けるに白木の臺に緑りの小松壹本植たりされバこそ神祕とする忘草ハ小松なりと此聖代ニ始て忘れけるといふ

の記述が見える。住吉の三忘（忘貝・忘水・忘草）として朱に有名であるが、その忘草としての松を植えるというところから、心の悩みを忘れさせる、あるいは、悩み事を解決するという心願成就という祈願を考える事も可能である。

一方、『住吉名勝図会』（秋里籬島著か、寛政七年（一七九五刊））には「立木松の圖」（図6）を掲げて

立聞社（神田の傍、住江山にあり、西向御社なり。○春日社ともいふ。また長岡の社とも云ふ）祭神祝主御神なり。これすなはち経津主命の別号なり（大和国春日社は、第一天児屋根命、第二姫御神、第三祝主御神、第四武甕槌命なり）立聞は立木なり。当社



図6 立木松の図（『住吉名勝図会』）

の神主、大神へはじめて出仕の時、まづ住江殿に入り、殿の前に松樹を植ゆ。これを立木の松といふ。この事当社の秘事なるよし。この神木を祝ひ祭り奉る御神なれば、その名を呼びて立木社といふなるべし（後略）。

と記述されている。ともすれば、この故事にならって、立聞社に対して松を植えて何かの祈願をしたとも捉えることができる。

(7) 住吉東ノ社こま犬立願の事

「東ノ社」が具体的に何をさすのか不明である。東ノ社として明記されている文献・図会の挿図・古絵図に心あたりがない。ただ、『撰津名所図会』の挿図（図7参照）に、「一本社」（第一本宮）の東手に鳥

三、住吉大社と呪祭

居が立ち、社のような比較的大きな建物がみえる。しかし、これが、ここで言う「東の社」かどうかはわからない。他の図会等ではこの建物が描かれていない。

現在の第一本宮を示すものと考え、社前に戦前まで銅製の狛犬が一對あった（太平洋戦争中、供出されたために現存せず）。ただ、この銅製狛犬が文化年間に存在したかどうかはわからないが、この狛犬にある種の祈願がなされたものと考えられる。狛犬に対する一般的な祈願として、狛犬の足をこより等で縛り、家出人の足止め・失せ物が出てくるといった呪術を掲げることができる。時には単にこよりで縛るというだけではなく、家出人の履物（草履・靴など）を狛犬の足に紐で結び付けるといふことも見られる。現在ではもっと多様な祈願が

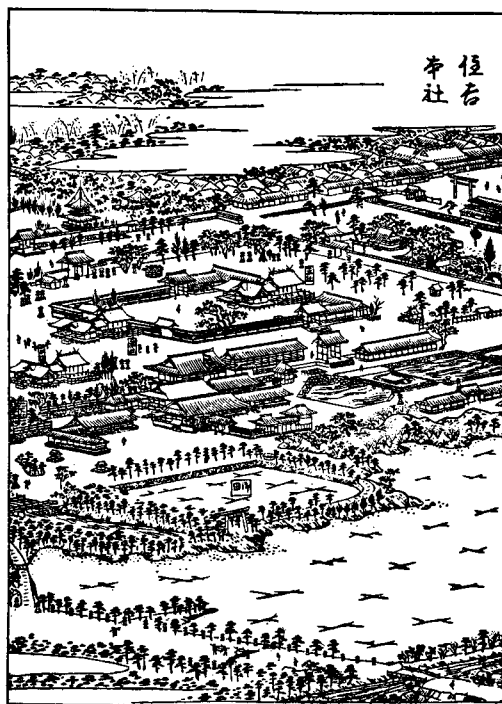


図7 住吉大社本社及びその周辺（『摂津名所図会』より）

なされ、とにかくどんな祈願の時でも行い、願いが叶うところを解く。やはりこの事例も詳細は不明である。

(8) 同痘瘡立願の事

痘瘡は天然痘あるいは疱瘡ともいい、法定伝染病の一つに数えられている。ジェンナーの創始した種痘が普及する十九世紀以前は、世界各地で流行をみ、その惨禍は数えきれなかった。しかし、種痘の成果によって、一九八〇年に世界保健機関（WHO）は天然痘の根絶宣言をするに至った。

我国では、天平七年（七三五）に流行したのが最初であるといわれ、『続日本紀』にも「天下患豌豆瘡、天死者多」と記されている。

「疱瘡は器量定め、麻疹は命定め」と諺に、イモ・イモヤミと俗に言われるように、顔一面に醜いアバタになることを恐れた。そして、麻疹同様、一生に一度必ずかかるものとされたので、感染しても軽く済むように願ったものであった。

『摂津名所図会大成』巻之七には、

新宮社 舟玉社の南に列る祭神 事解男 速玉男 伊弉諾 伊弉冉等の神にして又一神あり神祕といふ俗ニ此社を疱瘡神と云是ハ疱瘡の難を救わせ給ふなるべし

と記されている。この新宮社に対する痘瘡平癒祈願と考えられる。現在の新宮社の位置は、北神苑東側に今主社・八所社などと列しているが、先の『摂津名所図会大成』の著わされた安政年間にはその記述が



図8 新宮社（『住吉名勝図会』より）

ら、第四本宮の社前、瑞垣の外に祀られていた。さらに、古く元禄期から寛政期ごろまでは、津守寺（明治元年廃寺、現住吉区墨江二丁目）の傍に鎮座したことは、『住吉松葉大記』（土師惟朝編、一八世紀初頭成立）や『住吉名勝図会』（著者不明、寛政七年〔一七九五〕刊）の挿図（図8参照）からも理解できる。

新宮社が痘瘡に御利益があるという機能は、摂津全域に関する最初の地誌として有名な『摂陽群談』（岡田侯志著、元禄十一年〔一六九八〕成立）に次のような故事が記載されており、これに由来するのかも知れない。

五月廿八日、御田植の神事、御供の御田を植る早乙女は、泉州堺、南傾城町、乳守遊女勤之。世俗の所謂、神功皇后三韓を征し

玉ひ御歸陣の時、長門國より植女を召せ、五穀農業の事を世に廣し玉ふ。後世末葉愚に成て、乳守の遊女と成りぬ。因茲傾城、今に植女と成の例と云、或は何の帝御時にか、皇后惡瘡を愁て、終に宮中を吟出て于是來り、遊女の家に養れ、當社に祈り詣ること數日、神託して、諸人に面を顯し祈之也。因て此早乙女に相交て、託宣に隨ひ、惡瘡悉く愈て、顔色如も艶美にして、形容本の如しと也。しかし、もう少し詳しく考えて見る必要がある。先の『住吉松葉大記』の記述をよく見ると、「紀州熊野三所權現を祭ると云ふ」とある。熊野あるいは熊野路は、『南嶺子』（多田義俊著、寛延三年〔一七五〇〕）に「熊野路をはじめ痘をうけざる地処々にあり」と記されているように、古来より八丈島とともに痘瘡のない所として知られている⁽⁶⁾。また、痘瘡は新羅の国からもたらされた疫病であるとし、三韓征伐の神功皇后あるいは住吉大明神を祭祀して、痘瘡神とすることが多く行われた。これらの事項と前記の故事が結び付いて、痘瘡除けのカミとして信仰されるようになったと解釈できる。

(9) 同種かし稻荷の事

種貸社は倉稻魂神を祭神とし、古くは多米神社（『延喜式』）、あるいは苗見社と呼ばれていた。『住吉大社神代記』では「子神」として記されている。

種貸という名称のごとく、神靈の宿る稲種を授かる。あるいは、苗見という名の通り、苗を授かって豊作を祈願した。さらに稲に宿る穀

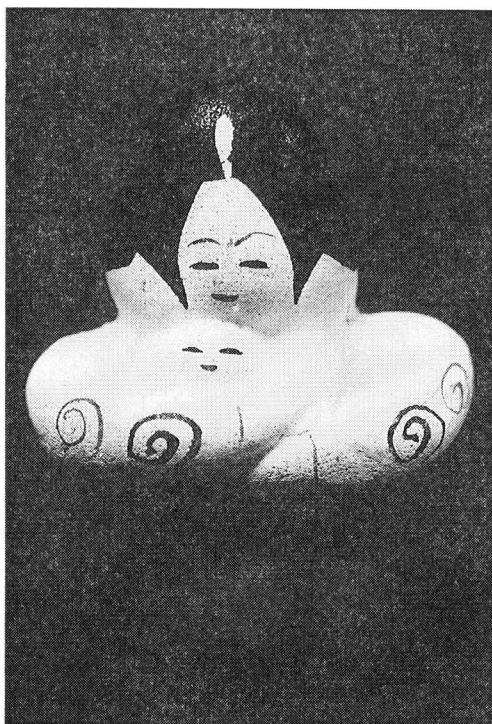


写真2 種貸人形

霊によって多くの稲を実らせるところから、また、「種貸」の名が人の種貸^Ⅱ子種を貸すという連想から、子授けの神として信仰されるようになった。「種貸人形」「子安人形」あるいは単に「タネカシ」「タネカッサン」と呼ばれる緋の袴をはく巫女が、赤ん坊を抱いている土人形（写真2参照）を奉納して、子授けの祈願がなされる。あるいは土人形をお守りとして小石を供えて祈願をする人もかつてあった。

一方、「お種銭」を授かり、それを資本に加えて商売をすると、農民の豊作祈願に対して、商人は商売が繁昌し、お金が増える^Ⅱ儲かるという。さらに、この種貸社でお種銭を授かった後、楠珥社（祭神^{うかつたまのおおかみ}宇迦魂大神）に参拝して商売繁昌を祈願する。「初辰さん」と親しみを込めて呼ばれている。さらに大歳社で集金の円滑を祈願する。そ

して、浅沢社で招福祈願や女性の場合は作法・芸事の上達・守護を祈るといふ、四社巡拝の一つに組み込まれている。

子授けの祈願を示すのか、商売繁昌を示すのか不明である。ただ、大歳社に対する集金の神としての信仰は、『初篇』の中に数えられているので、同書の性格上、種貸社の商売繁昌の信仰や祈願が触れられているしかりである。それが記載されていないということは、当時まだ商売繁昌祈願がなされていないか、あるいは子授けの御利益という事であろう。

(10) 同おもとの社楊枝の事

祭神は津守氏の祖である手搓足尼（田裳見宿禰）と市姫の二柱である。

『摂陽見聞筆拍子』（濱松歌國著、未刊行）に、「宮の楊枝を受けて、縁つきをいのり」とある。

この侍者社が縁結びの神として機能される由来は、手搓足尼が紀州の水軍と北九州の海部とを神功皇后のもとに結びつける役割を果たしたところ⁽⁷⁾に求める事ができよう。

戦後しばらくまで、同社からのお守りの中に長さ八センチ程の楊枝が二本入ったのを頒布していた。楊枝はお歯黒（鉄漿付け）の時に用いたりした用具である。良縁に恵ぐまれて嫁ぐと、結婚後又は懐妊後に一般婦女もお歯黒を行った。楊枝入りのお守りを身につけることによって、縁結びの祈願を行ったものと考えられる。

このことを裏付ける資料として、『住吉詣狂歌集』（天保三年＝一八三四）に、

縁組をあれとおもとの社にて

つまでふ楊枝うくる手弱女 客彦

という狂歌がみられる。

明治から大正にかけては、「慰と姥」図の小絵馬を奉納していたが、現在は「松と蛤」図の小絵馬になっている。また、おもと人形を買い求めて、思う相手の袂へ人知れず入れると縁が結ばれるともいわれた。現在も良縁・縁結びの祈願に参拝する人が多い。さらに、良縁と結ばれるためには、今までの悪縁を立ち切って、そして初めて良縁に結ばれると考え、近年は「縁切り」祈願もみられるようになった⁽⁸⁾。

(11) 同祭禮桔梗の花笠の事

この「桔梗の花笠」という言葉は二通りに解釈できる。一つは祭礼に用いる笠を桔梗の花で飾る。もう一つは桔梗笠と呼ばれる縫笠の一種で、市女笠と同様の巾子の先端が尖った笠を意味する。前者であるとする、それを用いる祭礼が見当らない。後者であるとすれば、この祭礼は現在六月十四日に執り行われている御田植神事ということになる。以下、御田植神事の花笠とみなしてみていくことにする。

江戸時代に用いられていた御田植神事の花笠は、『住吉名勝図会』の挿図（図9参照）を見ると、現在の市女笠とちがいが、菅製の縫笠である桔梗笠と思われる。今の花笠は薄い絹製の市女笠で、紙でつくった



図9 御田植神事花笠（『住吉名勝図会』より）

綿の花をつけている。この綿は、昔、長門の国から綿を献上した故事によるという。この綿の花を模して、雷除けの呪いに傾った。雷除けの効験を示しているものと思われる。

また、「住吉踊」の四人一組が心の字を象って踊るのが特色であるが、これは稲につく虫を追ひ払う意味を持ち、「稲虫追い踊り」とも称する。そして、社務所からはかつて蝗除けの神符が授けられたという。また、この日に少しでも雨が降ると、その年は水の心配がいらないと言って、農家の人々は喜ぶとも伝える。

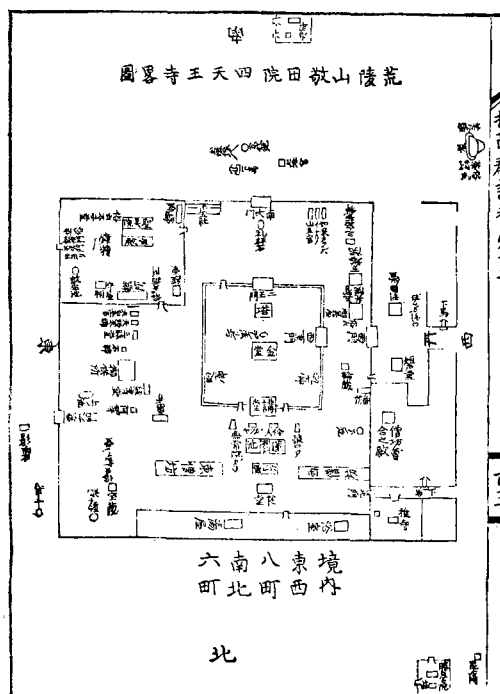


図10 四天王寺境内略図(『摂陽群談』より)

四、四天王寺と呪祭

『初篇』には十一例、同じく「二篇」には六例記載されている。

(1) 四天王寺太子堂立願の事

四天王寺聖徳太子堂へ縫針を貳本おさむれば婦人一生懐胎せず又他家よりおさめし太子堂の針を乞受かへり信仰すれば懐妊なす事疑ふべからず一子を得んと思はゞ針を受べし

歌國の『摂陽見聞筆拍子』に、

聖徳太子堂江縫針二本納れば、一生子を産事なき咒となれり、又

他家より納めある太子堂の針を受帰らば、子を設る事疑ひなし、一子を得んと思はゞ、右の通にすべし

と、同様の記述がみられる。

大島建彦氏は、四天王寺文化財管理室長南谷恵敬師の説として、太子殿廊内に祀られていた「守屋祠」にもなつて、針のまじないが伝えられたかもしれない」や勝鬘院の堂守中西かんの「太子堂で針供養をおこなっていたことについて、ごくかすかながら聞かれていた」と、二人の談話を掲げながらも「かならずしもあきらかにわからない」と結んでいる。

針は、古くから男根の象徴とされていた。しかも、太子堂の前には戦災で焼失してしまったが、二股竹もあり、よりイメージが強くなされていた。針を納めるということは男性との接触(性交)を断つ意味を持ち、避妊に通じたと考えられる。懐妊の方はその逆で、誰かがカミに預けた子供をいただくことになるので、懐妊するとされた。

現在ではこの太子堂に対する信仰はなくなっている。他地域の同種の信仰として、愛媛県松山市の太山寺でみられる。子安観音に対して、子供の欲しくない女性は縫針を納める。子供の授かりたい女性は、納められた縫針を持ち帰り、その針で夫婦の肌着を縫って身につけるとよいという。この針を「子授け針」と称している。

(2) 紙子佛立願の事・同頭痛立願の事

天王寺の紙子佛は其名世に高く聞へて諸人靈驗をよく知る所なり

中にも婦女縫針のみに疎き人信心をこらし紙子を縫て佛へ奉るべし追々手利になる事疑ふべからず

同じくこの紙子佛へ頭痛平愈の祈願をこむるに忽地志るしあり毎月十日におこたりなく参詣すべし願成就のうへハ帋子を縫て奉納すべし

『摂陽群談』に、

萬塔院 大阪順礼第廿四番十五社の西にあり、千手観音・四天王・賓頭盧を安置す。十月八日より同至十二日、毎日酉の尅十講会修事、毎年同之。

とある。また『摂津名所図会大成』には、

賓頭盧尊者 此像に祈願をなし成就すれば帋子を供するをならひとす故に帋子佛と云

と記されていて、祈願のお礼参りに紙子を納奉することは記されているが、祈願内容・方法等については言及されていない。

四天王寺発行の「紙衣まいり」というリーフレットに「萬燈院（紙衣まいり）由来記」として、

紙衣仏をまつるのは我が国ではこゝ一カ所だけで、この羅漢は五百羅漢の一人で難病に苦しみながら紙の衣を着て修行し除災無病の利益をあたえようとの誓願をたてたといわれ、紙衣佛を念ずると身も心も清浄になり宿願がかなえられる（後略、傍点筆者）

とあるが、先の『摂陽群談』『摂津名所図会大成』の記述でもわかるように、祈願対象は賓頭盧尊者であるので、日本に一カ所しか祀って

いないという表現は適切ではない。

「紙衣仏」という名称の仏像とする方が誤解がなくてよい。

祈願方法や御利益などにも長い歴史の間に変化が生じている。裁縫上達祈願は早くに忘れ去られたようである。『狂歌絵本花の梅』『白縁斎梅好著、寛政十二年（一八〇〇）に、

同まんとう院に紙子佛常に紙子を着し給ふ諸人立願をこめ御礼にあらたに紙子をきせまいらす又御茶湯を上るは油をかける地藏尊のことし

堂の前に木にて鉦のかたち有是をならすなり

とあり、古くはお茶湯を行って祈願をしていたことがわかる。また、現在では、堂の前の台上に数多くの木槌が奉納されていて（写真3）、



写真3 紙衣堂の奉納物（木槌）

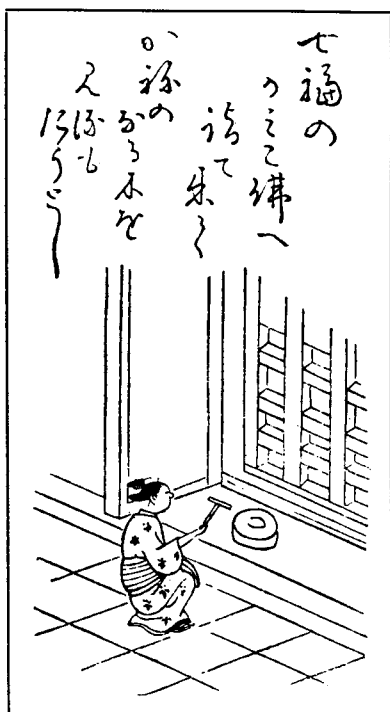


図11 紙衣堂への祈願（『狂歌絵本浪花の梅』より）

大阪市天王寺境内仁王門西手の賓頭盧佛。紙衣のお守を授く。賓頭盧の前にかけてある木の槌にて鼻部を叩きて祈り、紙衣のお守を戴きて帰り、病人の蒲団の下に敷くときは病が治すると。⁽¹⁰⁾ 昭和初期頃の祈願の様子がわかる。戦前までは、お参りに来ることのできない病人のために、紙衣のお守——中に紙衣の雛形があり、その背部——に石持（全快）・短冊（長びく）・赤の三角（生命なし）の

祈願者は、木槌で台下の白状の物を三度たたいたり、こすったりしてから、各自の病む箇所をたたいたり、なでたりすると、病気が平癒するといわれている。白状の物は、『狂歌絵本浪花の梅』の記述及び同挿絵（図11）に見られる木製の鉦が原形であり、鉦の厚さが後々増すとともに、祈願者の増加等によって、摩滅が著しく、白状の形を是するようになったものと考ええる。

富士川游によれば

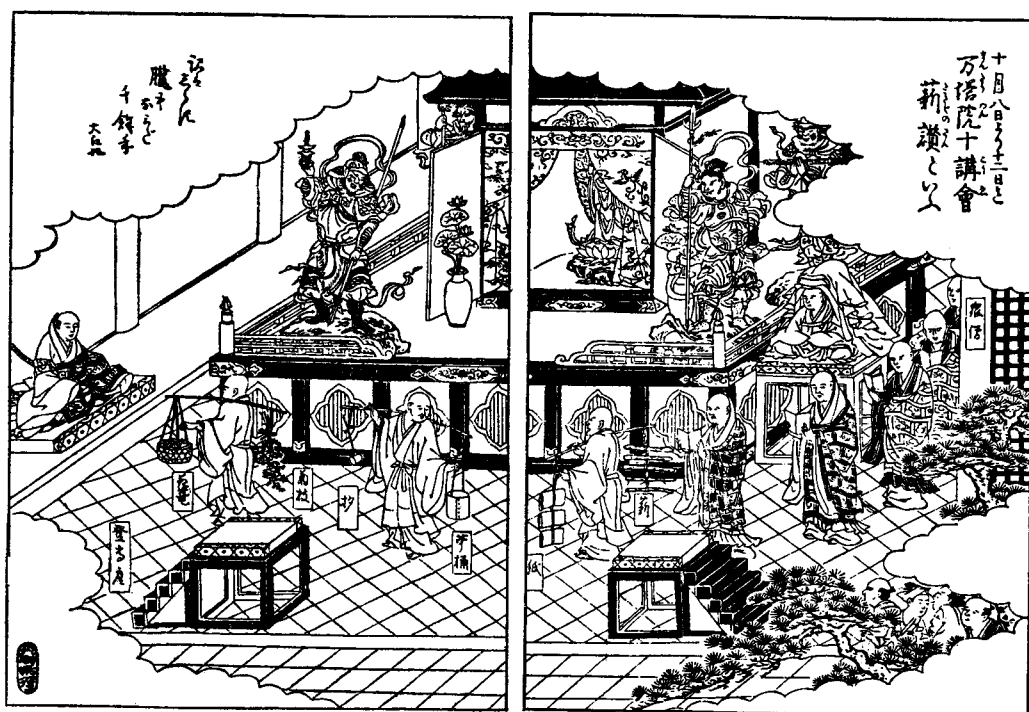


図12 薪の讃（『撰津名所図会』より）

マークがなされ、家族の者などは病人の今後が予知できたという。戦後になって、このマークは廃され、今日では、ただこの紙衣のお守をもらい受け、病人の枕の下に敷くだけである。寿命の尽きた人は、すぐに往生するし、寿命のある場合は、病気が回復するという。昭和三十年代後半からの、いわゆる「ポックリさん」信仰のブームに乗って、普段の日でも参拝者が多い。とりわけ、十月十日（新暦と旧暦の年二回行われている）の十講会（薪の讀ともいう、図12参照）は遠くからの参拝者もあり混雑する。この日に紙衣仏のお衣替えが行われ、古い衣を着せてもらうと（頭に被せる）、下の世話を煩わせずに往生するという。三年続けて参るとよいという。

なお、戦後しばらくまでは、お礼参りの時に、半紙を一折献じていたが、いつとはなく廃れた。この半紙で紙衣のお守を作ったともいう。そのかわり、木槌を奉納する人が多く見られる。頭痛平癒祈願からの変化に興味がそえられる。

(3) 同妙正大明神立願の事

同寺内元三大師堂の前鏡の池の中に鎮座します妙正大明神は疱疹を軽く守らせ給ひ則御守は同所妙見堂より出れば小兒を持る親々ハかならず受をくべし

『摂津名所図会』の元三大師堂付近の挿図には、池の中に三つの石塔が確認できる（図13）。この内の一つが妙正大明神であろうか。

生田南水の『四天王寺と大阪』には、

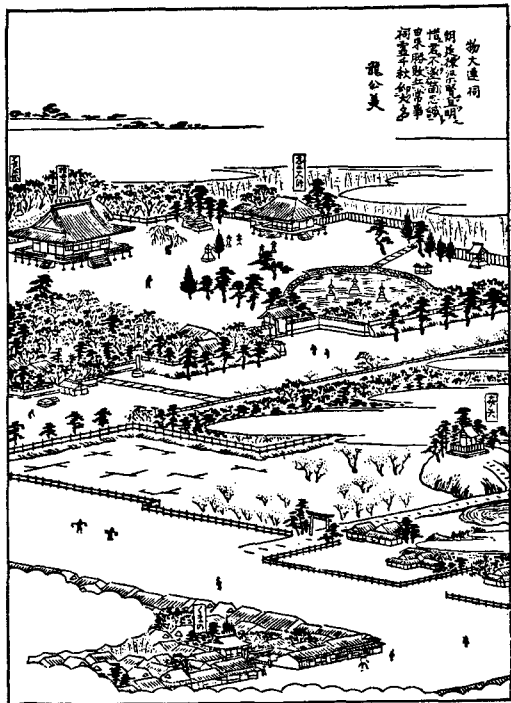


図13 元三大師堂付近（『摂津名所図会』より）

鏡の池、大黒堂の前にある円形の蓮池なり。中央の島上に真阿上人六字名号の石塔あり⁽¹¹⁾と記されているだけで、妙正大明神については直接触れていない。

この妙正大明神とは、木村博氏⁽¹²⁾や綿貫啓一氏⁽¹³⁾によってすでに指摘されているように、千葉縣市川市北方町の妙正寺（日蓮宗）などから勧請されたものと考えられる。そして、日蓮宗の寺々では疱疹神として信仰されているものである。

ただ、日蓮宗のカミが天台宗の四天王寺へ勧請されたかなどの経緯は明らかでない。

『初篇』記載全事例数七十八例中、疱疹に御利益があるとするのが十例あり、最高の割合を示す。近代医学が発達するまでは、疱疹と麻

疹の厳密な区別ができなかった。とりわけ幼い子供が罹る疾病であったため（一度は罹らないといけない）、子供を見守る大人たちの心配は今日以上であつただろう。一度は罹らなければならないのならば、病状が軽いようにと、子供を持つ親に対して「かならず受をくべし」という心遣いの籠った表現が心憎い。

(4) 同石神立願の事・同牛の宮立願の事⁽¹⁴⁾

同境内石神の社は旅へおもむく人首途のとき立願すれば道中達者にして少しも足のいたミなく其うへ旅中患難を除く

同境内太子堂の外北手牛の宮へ立願すればすべて足の病を平愈なす御禮には土細工の牛又ハ牛の繪馬を奉納すべし

歌國の『撰陽見聞筆拍子』にも、この『初篇』よりは簡略されているが、次のような記述がみられる。

同〔四天王寺〕境内石神の社は、道中するに達者なるを立願すべし、旅行に難をのがるゝ、又牛の宮に願をこめて、足の痛みを治する事妙なり、

両方の記述で注意すべきことは、「石神社」と「牛の宮」と俗称される社が二社存在したような表記になっている点である。近世大坂の地誌類や絵図等を注意深く調べているが、今のところ、二社の存在を具体的に示す資料に出会っていない。大島建彦氏が指摘しているように、「まったく同じ祠堂をさしていたかもしれない⁽¹⁵⁾」。いや、むしろ歌國の取り違いによるミスとする方がより正確であろう。両社の内容

を比較すると、共通点は御利益の足の病という御利益のみである。その御利益そのものも、「石神社」では旅行中の足の痛みが中心で、旅行中の患難除けがプラスされている。また、「牛の宮」の方では御礼参りの時の奉納物もある。さらに、祈願対象の社の名称が異なっている。こうしたところから歌國は確認せず、二社の扱いをしたのではないかと思われる。

『撰陽群談』には、

石神叢祠 同所院中にあり。聖徳太子當寺草創の時、竹木砂石人歩の所不及、牛車を以て令引之。伽藍諸堂悉く成れるの後、牛化して石と成れり。是を祀祭を以て石神と稱す。右四天王寺院中の神社、其所指寺院の部、當寺略圖に見えたり。

とあり、その縁起が記されている。このように、石神社は牛との関わりが深く、『撰津名所図会』に「石神祠 御供所の南に双ぶ。当寺草創の時、材石を牛車にて運送す。成就の後、牛化して石と成る。すなはちその霊をここに祀るとなん」とあるように、牛の霊を祀ったところでもある。以上の点からも、石神社＝牛の宮であったと解することができる。

さて、旅行安全祈願や足の病いという御利益は早くに絶えたようである。昭和初期には、小児の皮膚病の一種である瘡に御利益があるといわれ、土細工の牛や牛の絵馬を奉納した。奉納物は江戸時代と同じである。武井武雄の『日本郷土玩具』には、「石神堂の臥牛」の項目に、「古くは住吉製で背に大日如來の文字あるものが奉納されたと傳

へられるが、後全く伏見土偶に代つて了つた⁽¹⁶⁾とあり、住吉産から伏見産の土の牛に変わったことがわかる。また、尾崎清次の『玩具図譜』には、「大阪市（攝津）天王寺 四天王寺石神堂 臥牛（土）」の項目に、「石神堂は瘡神なりと云ひ傳ふ、故に瘡の治癒を望む者此堂に祈願し、牛を奉納す。今は繪馬及伏見焼のものを多く用ふ、圖〔省略〕は伏見焼の臥牛なり、瘡は「クサ」又は「カサ」と呼ぶ、濕疹疾患の俗稱なり。牛は草を食ふものなるが故に瘡を食ふ爲に奉納するなりといふ俗傳あり⁽¹⁷⁾」と記され、皮膚病に御利益のあることが述べられている。

今日でも、数多くの牛の絵馬が奉納されている。瘡だけではなく、皮膚病全般へ御利益が拡大され、さらに、あらゆる病氣・願いへと拡大されてきている。

(5) 同齒神立願の事

同東門の東齒堅大明神世に齒神といふ齒の痛ミに立願すれば忽ち平愈す御禮にハ繪馬を奉納す

東門から五〇メートル東に、小儀社跡の碑がある。この碑の辻向い（南側）に小儀社神社の齒神がかつて祀られていた。

この小祀は、近世から明治初期にかけて、大阪を代表する有名な小祀であったことが、『撰陽群談』、『絵本名物浪花のながめ』、『撰津名所図会』、『撰津名所図会大成』等の文献の他、『増修大坂指掌図』（寛政九年＝一七九七）、『増脩改正撰州大阪地図』（文化三＝一八〇六、図

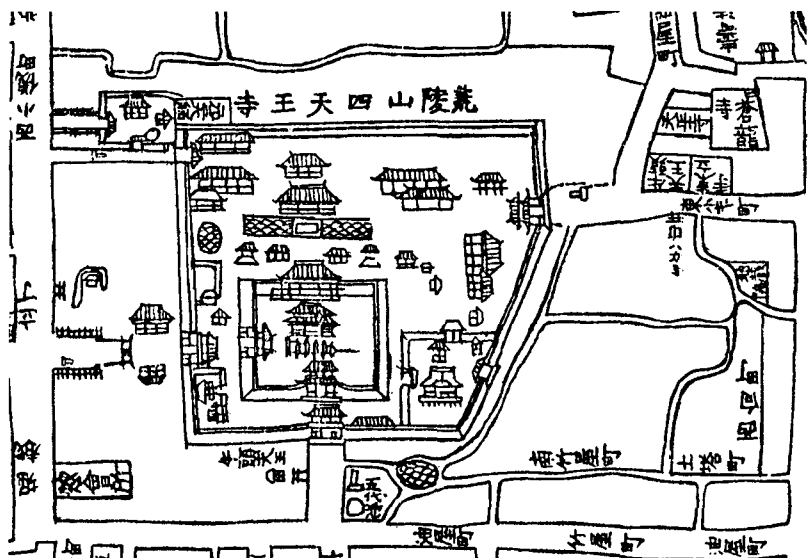


図14 齒神（『増脩改正撰州大阪地図』より）

14参照）などの古地図にも記載されているところから判断できる。とりわけ、△図14▽と『弘化改正大坂細見図』（弘化二年＝一八四五、図15）を比較すると、後者の絵図の特徴のためある程度の誇張はみられると思うが、前者よりも齒神の表示が大きく表わされている。弘化頃は文化頃よりも、この齒神に対する信仰が盛んであったとみること

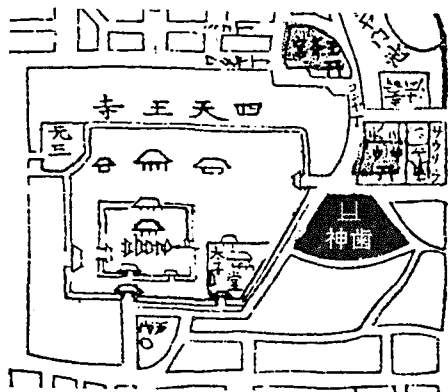


図15 歯神『弘化改正大坂細見図』より

ができる。

この信仰が盛んになった、前記図13と同じ年号を持つ、『四天王寺東門歯神神宮修覆寄進帳』が、大島建彦氏によって紹介されているので、次にそのまま全文を掲載する。

抑此歯固大明神ハ、往古聖徳皇太子難波大寺四天王寺御建立の御時、和朝医薬の祖神大巳貴尊・少彦名尊、本地薬師如来・観音菩薩勧請鎮座しまして、諸人病患なく寿命を長く延養ふ飲食の根本、齒ハ生涯の宝、齒の疼痛、齦の煩、牙拔毀事なく、男女顔色美數倍の変らず壯堅ならしむるとの御誓願にして、一度歩行をはこぶ輩願望空しからず、種々の疳癆を平癒し齡芽出度保たせ給ふとの靈験日々に新なりけり。然に、星霜年を経て社壇朽損じ大破に及候ニ付今般修覆の志願発起せしめ候間、四方の御施主他力の御寄進希所ニ候。尤多少によらず御苦勞被下候御姓名夫々相記し置、於ニ神前一朝暮丹誠を抽で、伽藍の余光とひとしく功力を蒙、常燈の明を永照さんと欲る而已。猶神伝国史数多在といへとも筆紙に尽しがたし。故に略之。弘化二巳年中春日

天王寺公人 玉造七郎兵衛久次 講中世話人⁽¹⁸⁾

この宮修覆に伴って、神域の拡大につながったとも解釈される。

ところで、この歯神に対する祈願は『摂津名所図会大成』に詳しい。

齒神祠 壽法寺の南ニあり祭神つまびらかならず薬師如来を内佛とす世人齒の痛ニ患ふる時ハ大豆を三粒いりて此に詣で神前の土をはりて此三つづの煎豆をうづみ此豆の芽を出すまで齒のいたみを除き給へと祈願すればかならず平癒す也尤其往返の道にて知己人に逢とも決して言をかわすべからず無言にて通ふべしといふ齒痛の呪いとして、広く日本各地に分布する、炒り豆を供えて、豆が芽を出すまでの間、齒の痛みを止めて下さいという祈願方法がとられている。また、無言参りという禁忌も記している。

明治になってからの歯神は、『大阪市中地区町名改正絵図』（明治五年、『大阪府管轄市街区細見縮図』（同十年）に記載されているので、廃仏毀釈以後も存在したことがわかる。そして、明治四十一年に小饒社が大江神社に合祀された時に、齒神は廃社となった。

(6) 同庚申堂参詣の事・同境内九頭龍權現の事・同頭痛除の事

同南大門の南庚申堂青面金剛童子を信心なせバ利益多き事ハ諸人よく知れる中にも七庚申懈怠なく参詣すれば小兒の痘瘡輕し併ながら血の穢を忌ミ嫌ひたまへは婦人産後七十五日忌ミ過て参詣すべしかならず七十五日の内に庚申あらバ参詣すべからず

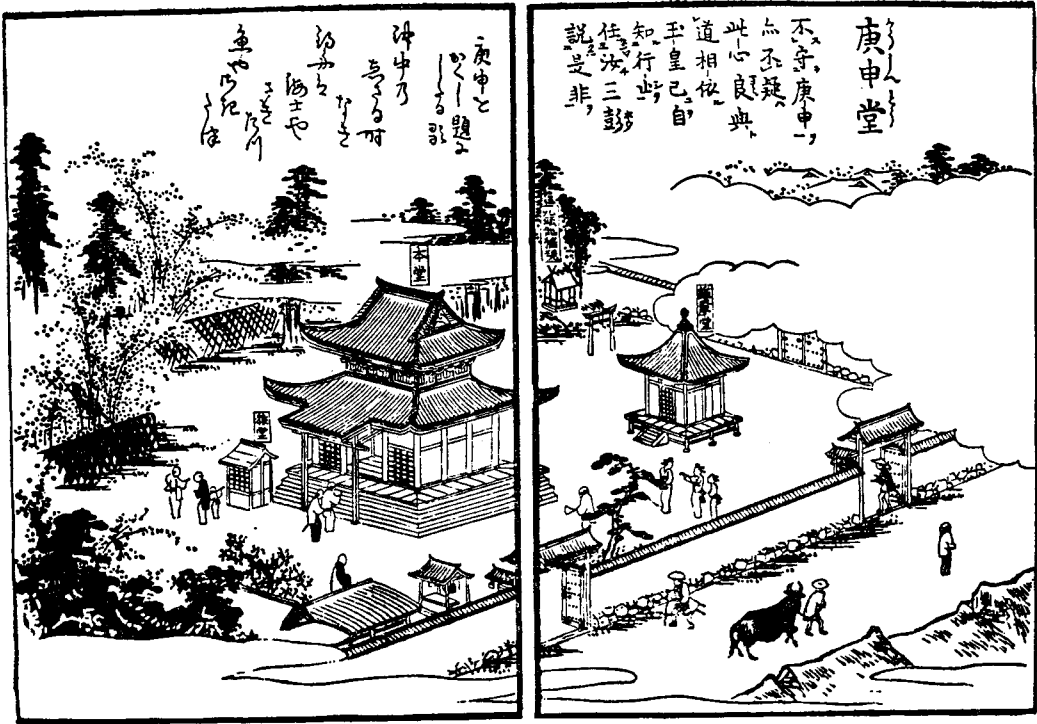


図16 庚申堂・九頭龍権現社（『住吉名勝図会』より）

同庚申堂の境内九頭龍権現社ハ世に庚申の神忌と唱へて瘡毒の小兒を連て参詣の輩道にて草を七種摘とりて九頭龍権現へ捧げ平愈を祈り御禮参にハ牛の繪馬土の牛を奉納す

同庚申の日門内北手九頭龍権現宮のまへにて商ふ蒟蒻の田樂を喰へばいかほど強き頭痛にても平愈なすといひ傳へ参詣の輩かならず立寄て喰ふ事とハ成たり

庚申堂は、正しくは正善院と称し、元々は天台宗延暦寺末寺であつた。

現在も庚申の日に参拝する人は多いが、疱瘡平癒祈願・瘡毒平癒祈願及び牛の絵馬や土細工の牛の奉納、頭痛平癒祈願はみられず、早くに忘れ去られたようである。

『難波鑑』第六、「納庚申 かのえさるの日」の項目に

○天王寺の庚申ハ。諸國の本寺也。一とせのうちに。六度づム。潤あるとしハ。七庚申あり。なにても。所願ある人。一色をハ。かなへ給ふとて。参詣の人々初庚申よりも。願成就いはるおさめの庚申まふでよと。羣集して。十二燈々々とよぶる聲も喧く。七いろの菓子々々とうるこゑもいそがし。さてまた。今日夜をねざることハ。三尸天にあがりて。人の善惡を告によりて。夜をまもりて。ね侍らぬとかや。

とあり、諸願成就の御利益や献燈や「七色の菓子」の記述がみられる。また、『守貞漫稿』（喜多川守貞著、天保八／嘉永六年＝一八三七／五三）の第二十三編には、

(前略) 同庚申大坂四天王寺庚申堂に群集す七種の鹿菓を紙三角形に包み十二銭を以て詣人に授く毎戸々裡に張て賊難の咒とす又今日庚申昆布と號て堂邊多く昆布を賣り又牀を並べ燭酒に菟蓐の田樂を賣る是も盜難咒と云近年今日市中をも賣り巡る(後略)さらに、同書二十八編には「菟蓐」の項目に、

因に云大坂の俗庚申の日四天王寺青面金剛童子に群詣し堂に菟蓐田樂店と昆布店多し昆布は買て家に携へ菟蓐は食を咒とすと云近年今日は市中を庚申菟蓐と賣巡る也

とみえる。盜難除けについては記されているが、疱瘡については記されていない。菟蓐の田樂は、現在、無病息災を願って北向きに立って食べるとよいとされている。庚申昆布については、三輪善之助が「天王寺庚申堂には、庚申の日には参詣者多く集り、堂より授与する七色の守は盜難除けとなり、境内に商う菟蓐屋にて北を向いて是を食すれば運強しと云ふ。又昆布屋多く軒を並べる。庚申に求めたる昆布を細く三百六十五に切り、毎日是を食する婦人は髪が濃くなるといふ俗信がある⁽¹⁹⁾」と記している。

やはりここで考えなければならないのは、「北向き菟蓐」であろう。この理由について、平野実は、「菟蓐を食べながら心願をこめる人もかなり多い。これが俗にいう『北向き菟蓐』で、このさい口をきいてはならぬことになっている。庚申さんは南面していると信じられているから、それに向かって祈願するには、当然北向きになるわけである。また菟蓐を食べると腹の中の砂を払い出すという俗信は、広く行われ



図17 庚申参り(『摂津名所図会』より)＜庚申参り特有の裸参りの男性が描かれている＞

ているので、三戸を追い出すことを連想し、これが庚申さんと菟藷と結びつけたと考えるのもたいへんおもしろいが、はたしてどうであろうか」と説明している。また、三善貞司は、「北を向いて卵を飲むと喘息封じのまじないになるともいうし、薬鍋を煎るとき北に向けておくと病が早く治るとの伝えもあるとか、その辺からヒントを得て店屋がはやらせたのだろう⁽²⁰⁾」としている。

しかし、ここに面白い資料がある。辨美志によると、大正時代を懐古して、「その中の一人に加わっていた私が冗談半分に『こんにやくは北向いて食べな願が利けへんのやで』と云うた處が、皆が面白半分にそれを間に受けて、北を向いてそのこんにやくを食べたものである。

それから後はお詣りする毎に、此の言葉を誰れかゞやる(中略)自分達はそれをはやらすつもりでも何んでなく、只面白半分冗談めいてやつたのが、他の人々迄が北を向いて食い始めたので、愈々皆は愉快になつてしまった。それから數年経つと、こんにやく屋の人までが『北を向いてお上りやしたら願が利きますのや』と云う様に成り、昭和時代になると、もう、こんにやくは北を向いて食べるものと相場がきまつてしまった⁽²¹⁾』という告白が記されている。これが事実だとすると、事の発端は全くの冗談からであったが、先の平野・三善両氏の説く要素がプラスされ、もっともらしいイメージが形成されたものと考えられる。庚申さんから頒布されるものとして「御七色」のお守りと素焼きのおすり鉢状の「土器」がある、お守りは家の入口に張れば盗人除けの呪いになるといい、『守貞漫稿』の記述にみられた伝統を受け継いでい

る。また、土器^{かわらけ}には願文・年齢・氏名を書いて、各々の家の近くの川か、あるいはお参りの帰り道の川へ流すと病除けになるという。

(7) 同西大門布袋像の事

同西大門の南手に布袋和尚の石像あり立願すれハ婦人乳汁をよく出す事を守りたまふ小兒ある親々ハかならず平日信心すべし

布袋堂に祀られる布袋像は「乳^{ちち}のオンバサン」と親しみを込めて呼ばれていて、母乳の出ない婦人の乳授けの祈願がなされる。

また、乳が多くて困る人(乳児が死亡したため、乳にしこりができて困る人も)は乳預けの祈願をする。さらに、近年は「乳」に関係すれば御利益が得られるという解釈をして、「乳癌」の治療祈願もみられる(写真4)。

祈願の方法は少し



写真4 乳癌治療祈願の小絵馬



図18 布袋像(『神社仏閣願懸重寶記初篇』より)

ずつ変化をしている。『初篇』の挿図(図18)に見られるように、元、お堂がなく雨曝しで祀られていた。この頃は、手製のあんころ餅を布袋さんに食べてもらおうと称して、像の口に餅をねじ込んだと伝える。その後、これではあまりに忽体ないということで、元あった所から少し離れた現在地へお堂を建てて祀るようになった。同時に、あんころ餅も像前へ供えるようになったという(現在でも時折、像前に供えられた餅を見かける時がある)。追々、自家製のあんころ餅ではなくなり、門前の餅屋で二包のあんころ餅を買って求めるようになった。祈願者はあんころ一包を供え、堂主にお膳料七分を納める。お膳料一日につき洗米一包と、「乳授け図」の小絵馬を受けて帰り、残り一包のあんころ餅と洗米を入れて炊いたごはんを食べるとよいという。

御利益あれば、お礼参りをし、先の小絵馬を奉納し、お膳料、あんころ餅を供える。戦時中の物資不足のため、あんころ餅奉納が廃れ、小絵馬に願文・姓名・年齢を記して祈願するだけとなった。堂前の絵馬掛けには所狭ましと数多くの絵馬が奉納されている。

しかし、この布袋像は本来「乳」とは無縁のものであった。この像は、近松門左衛門の弟岡本一抱の養子岡本蘭斎(宝暦十二年117六二没)が写経を納めるために建立した経塔である。その経塔がなぜ「乳」と結びついたのであろうか。その理由が庶民信仰の大きな特質であろう。この像の近くには、聖徳太子の乳母二人の庵(引声堂寛之坊)が慶長の兵乱(一五九七〜八)まであった。この「太子のおんばさん」に対して乳授けの祈願がなされていたかどうかはわからないが、その跡にこの布袋像が祀られ(建立され)、布袋像の胸が豊かに見えることも手伝って、「太子のおんばさん」が「乳のおんばさん(布袋像)」と変わり、乳授けの祈生・信仰が新生(移行)されたと考えられる。

(8) 天王寺勝曼院立願の事

勝曼院は天王寺区夕陽丘町に位置し、元は天台宗に属していたが、明治の後期に四天王寺別院となり、現在は四天王寺同様に属する。当院の前身は、聖徳太子が四天王寺を建立し、施薬院・悲田院・療病院を設けた時の施薬院が起源である。

本尊は愛染明王で、「愛染」を訓読みしてアイゾメ(11逢初)の神

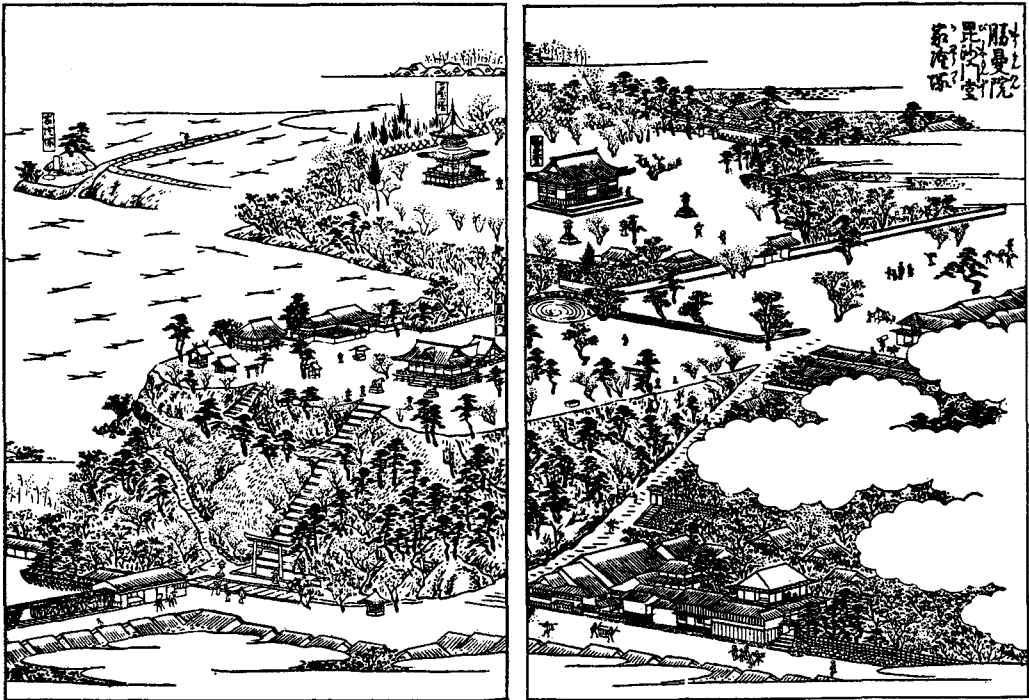


図19 勝鬘院全景（『撰津名所図会』より）

とし、色町や俳優などから厚く信仰された。

『四天王寺秘密記』（慶長十八年Ⅱ一六一三写記）に

愛染明王、三面六臂、色赤く壺に乗り、宝冠ほらの貝三つの玉、則ち三面六臂八天大地三方にかたどる。人体にとりては父、母、我三人のかたちなり。色の赤きは陽気の色なり。人体にとりては血の色、則ち生まるるかたちなり。壺に乗りしは地なり。地は万物を乗せて生ず。人体にとりては母の胎内子宮なり。ほらの貝三つの玉、陰気なり。夜の心なり。則ち地にして、夜中陰気が陽気をむかへていただき上げ、東日輪とあらはれ出づるかたちなり。是れ陰陽交合して万物を生ずるきざしなり。人体にとりては、母の陰の精、玉門のかたちなり。父の精をむかへて交合して、一滴の精、母の子宮にとどまり、人体をうけて十月を経て生まれ出づるを云ふきざしなり

と愛染明王についての説明を記述している。

さて、本題の事例については、その表記が単に「勝鬘院立願」となっていて、信仰対象や御利益等の記載がない。そのため、断定は不可能であるが、ほぼ前述の本尊愛染明王に対する信仰と考えられる。

『撰津名所図会大成』には、

例年六月朔日ハ本尊愛染明王の開扉ありて諸人に拜ましむ俗にこれを愛染まつりと號す浪花夏祭の最初にして老若參詣して羣をなす就中傾城遊女俳優をはじめ衆人の愛をうけんと欲するもの歩を運ひて愛敬を祈るがゆへに往來花麗にしていと賑わし

とある。この愛染祭りは大阪の三大祭りの一つに数えられる。江戸時代、大坂の遊郭においては、旧六月一日は正月納めの祝い日として、大紋日となっていた。遊女はそれぞれなじみ客に揚げ花をつけてもらい、盛装して色駕籠に乗って愛染参りをした。とりわけ、愛敬を売りものにする遊女・芸人・水商売の者は各自の定紋をつけた提灯を競って奉納して祈願した。近松門左衛門の『冥途の飛脚』には、

振返り見る勝鬘の、愛染様に愛敬を、祈る芝居の子供衆や、道頓堀のいろいろや、馴れしくるわのそれぞとは、紋で覚えし提灯の、なかにはかなや槌屋内、この木瓜に打添ひて、私が紋の松皮の松に千歳を祈りしに、定める契り提灯（後略）

と、当時の習慣を巧みに取り入れた、名場面、名台詞がある。

また、愛染本祭りの日は、「氷の朔日」と称せられ、冬に囲っておいた水を一口でも食すると、夏中疫病にかからないともいわれた。そして、客をもてなす際、酒といっしょに搔餅を出した。『難波鑑』（一）無軒道治著、延宝八年（一六九〇）にも、「氷餅」を食することが記述されている。大正頃までは関西地方の青楼や旅館では、酒のあしらいとして最初に搔餅が出されていた。⁽²²⁾

(9) 勝曼院連葉の奈の事

『摂陽見聞筆拍子』には

天王寺西勝曼院は、往古施薬院の舊地なり、境内に連葉の松とて有、松の葉半ばより二つに別れ、本は半まで一つなり、依て連葉

と名づくとぞ

と記され、連葉松の名称は出てくるが、それに対する信仰等に関して不明である。『摂陽群談』（岡田徹志著、元禄十四年（一七〇一）をはじめとして、管見の地誌関係の資料においては、「連葉の松」に関する記述がみられない。大島建彦氏は、「かねて、男女の愛を祈る者が多かったが、今日でも、縁結びのお守りを受ける者がすくなくない。この寺の『連葉の松』については、かならずしもよく知られていないが、かつて、本堂の前の方に、大きな松の木があったので、これに縁結びを願ったのではないか」と結んでいる。そのうえに、同院には映画でも有名になった「愛染かつら」がある。縁結びの霊木として若い男女に人気がある。さらに、「愛染霊水」もあり、この水を飲めば良縁が結ばれるといった。また、妊婦が飲めば安産間違いなしともいわれ、藍商屋はこの水を用いると藍物がよく染まるといい、講を組織して信仰した。

「連葉」という表現から、「連理」と同様に縁結びと解釈しても間違いないであろう。

(10) 同薬師堂安産立願の事

この薬師堂とされているのは、『摂陽群談』や『摂津名所図会』等で「椎寺」とされているものであろう（図13参照）。この薬師堂に安置されている薬師仏は、伝教大師が近くの椎の木を伐って像を彫ったといわれる。

安産立願の事例については思い当たらない。現在、この薬師堂は戦災をうけた万灯院のかわりに移築されたが、戦前には堂の扉に穴のあったカワラケに性名・年齢を記して耳の病の平癒祈願がよくなされた。古くは安産祈願がなされ、後々耳の病に御利益が変化してきたのであろう。

(11) 同文珠堂立願の事

『摂津名所図会大成』に「食堂 六時堂の後にあり 文珠堂ともいふ 本尊 聖僧文珠大士」と記されているところから、この食堂（文珠菩薩）に対する信仰と考えられる。

大島建彦氏は、「四天王寺の立場では、一般の参詣者などが、食堂の文珠に対して、何らかの願をかけることは考えられないようである⁽²⁴⁾」としているが、これは逆に、近世における四天王寺（住吉大社も同様）をめぐる信仰及び『重寶記』に採録された信仰の一大特色である。つまり、四天王寺のような大規模で格式のある寺院の場合、民間信仰といったようなものは、宗教の教儀から外れていて、布教活動の妨げになる要素を多分に含むため、排除される場合がある。しかし、四天王寺や前述の住吉大社の場合は、そういった民間信仰をそれぞれの信仰大系の中に組み込むことによって、布教に役立たせていったのである。食堂といえども、一般の参詣者が自由に参拝できるようになっていたと考える。

『摂陽群談』に、「食堂 六時堂の後にあり、聖僧文珠大士を安置す。

正月元日酉尅万石米の祭、毎年修行同之」とあり、この「万石米の祭」と関係があるのかもしれないが、この事例に関する詳細は不明である。

(12) 同引導鐘の事

四天王寺には、石舞台の南西にある北鐘堂と、南大門北東にある南鐘堂の二つの鐘堂がある。北鐘堂の鐘は黄鐘調で、尅越より七律高く、南鐘堂は盤渉調で、尅越より九律高いといわれた。とりわけ、北鐘堂は『摂津名所図会大成』によると、「此鐘を無常院の鐘と號す此鐘にしへハ黄鐘調にして天竺祇園精舎の無常院の鐘の聲に同じ故に無常院のかねといふ」とある。

この鐘の音は極楽まで通じるといい、引導鐘と呼ばれた。春秋の彼岸や盂蘭盆には、参拝者は法名を記した経木を北鐘堂に納めて回向を依頼する。その後、亀井の水へ経木を流し、亡魂の追善供養をする。経木が浮けば、極楽往生したといい、そのまま沈んでしまうと、まだ往生せずに迷っているという。

この事例は、亡くなった人の供養を示し、亀井の水の経木流しまでの一連の作法を述べようとしたものと考ええる。

(13) 同七月千日参りの事

神仏に祈願をするために、何度も重ねて参詣することを百度参り（百度詣）、千度参り（千度詣）と称する。この百や千という数字は、



図20 角大師のお札

元来、たんに数が多いことを意味していたが、のちのち、百、千の実数を重要視するようになり、百日間（百回）、あるいは千日間（千回）参詣しなければならぬとされた。そして、この千度参りと千日参りは、厳密に言えば異なり、千度参りという習俗が成立した後、観音信仰と結びつき、特定の日に参詣すれば千度参ったと同じ功德があるという千日参りの習俗が誕生した。その時期は江戸時代になってからで、上方ではおもに千日参りと称し、江戸では四万六千日と称する。

四天王寺の現行の千日参りは、八月九日の夕方六時半過ぎに、管長を先頭に一山僧侶十五名が列をなして、本坊から伽藍内を『般若心経』を唱えながら一周する。そして、石舞台、六時堂へ進み、堂内で法要を行う。戦前、六時堂内で僧侶が後ろ向きに坐って回向し、参詣者は環坐して百万遍の数珠繰りをしたが、今日は、丸池を取り囲む形で行われる。

一般参詣者は、観音像が開帳されている六時堂でお参りをし、厄除けのお札（図20参照）を受ける人もある。手に経木を携え、引導鐘で回向をし、亀井の水では水供養する人びとで混雑する。帰りには、境内に並ぶ露店でほおずき（酸漿）や盆の供花に用いる高野槇を買求

める。

江戸時代の様子をみると、『名所絵入難波鑑』には、天王寺千日詣、同「七月」十日、此日天王寺へまいれば 千日むかふとて、参詣の群集大かたならず

と記されているが、『狂歌絵本浪花の梅』（陰山梅好著、寛政十二年Ⅱ一八〇〇）には、次のように述べられている。

毎年七月十日ハ聖霊を迎ふとて天王寺へ参る事未明より老若男女おびたゝ數群集す同十六日ハ聖霊送りとて又群集する事十日に同し両日とも千日参りといふ筆紙にのへかたし

千日にかつた萱にハあらねとも

けふ一日てつみかほるひる

有かたさあまりて申念仏の

一聲はなせハ千日まいり

艾よりきゝめのつよい天王寺

けふ一トひか千日まいり

この記述から、七月十日だけではなく、十六日も千日参りと呼ばれていたことがわかる。つまり、近年は千日参りを千日盆とも称しているように、十日が盆の迎え日、十六日が同じく送り日と重なるため、盂蘭盆会と千日参りとの混同が当時からあったことが理解できる。

また、千日参りの行人については『嬉遊笑覧』（喜多村信節著、天保元年Ⅱ一八三〇）に詳しい。

千日詣の行人はかならず鳥足（25）か一枚歯の高あしだをはき手の長さ



図21 千日参りの人物①
（『四時交加』より）

阿加桶に櫛をさして頭に戴き胸に鳧鉦をかけて打ならしありきしがこれも今は草鞋をはき阿加桶は手に持てるひは持たぬも多かり物戴きし古風今は絶果ぬ

ここに記された古風な千日参りの様子は、『四時交加』（山東京伝著、寛政十年Ⅱ一七九八）の挿絵（図21）によく表されている。ただ、鳥足が指叉状に描かれているのと、櫛らしいのが見えないのが気になる。また、これより少し後に著された『浪花十二月書譜』には、

七月十日諸寺院へ参るを千日の功德に当るといふを以て千日参りといふ多くハ京て清水寺其外大坂ハ天王寺へ参るを主とする残暑の堪がたく殊更盆前せわしき中を参るを以て功德千日に当るといふ

という記載とともに図22のような絵も示されている。これを見ると、前述の『嬉遊笑覧』で指摘されたように履物は草鞋になっている。尻からげで右手に持っているのは、経木を布で包んで提げているのであるうか。手桶や鉦は見られない。左手で肩にあてて持っているのは、先の『狂歌絵本浪花の梅』に詠まれている萱であろうか。飾り物らし



図22 千日参りの人物②（『浪花十二月書譜』より）

いのも見えるが、詳細は不明である。

天保十三年（一八四二）から弘化四年（一八四七）にかけて、銭湯における男女混浴禁止をはじめとして、男女間の風紀の取り締まりのひとつに、千日参りや七墓巡り⁽²⁶⁾を禁止する御触や口達⁽²⁶⁾がたびたび出されたため、図21のような鉦や手桶を持たない姿に変わったと考えられる。また、このように禁令が出されるほど、千日参りは盛んに行われ（香具屋主主著、『虚実柳巷方言』、寛政六年Ⅱ「一七九四」）には、「千日まいりといふ事近年のはやりもの」と記され、江戸時代中期から盛行したことがわかる）、しかも、男女風紀の乱れも多かったものと解釈できる。

この事例は、角大師のお札による厄除けか、千日の功德、祖先供養を示すものと考ええる。

おわりに

大阪の社寺を代表する住吉大社と四天王寺に関する呪祭について、『初篇』ならびに「二篇目録」に記載されている事項についてみてきた。その際にも多少触れたが、ここでもう一度、カミ・ホトケが庶民の要求により造り出されていくところを、四天王寺の例でみていくことにする。

① 乳のオンバサン

布袋像の祭祀されたところが、聖徳太子の乳母の庵であった場所であった。そして、布袋像の胸が豊かにみえる。そうしたところから、「太子のおんばさん」から「乳のオンバサン」が生まれる元となった。ただ、この場合、「太子のおんばさん」に対して、乳授け等の信仰があったかどうかはわからない。しかし、焼失した乳母の庵は太平洋戦争後になって小谷山宝泉寺（中央区安堂寺町一丁目）に再興されたが、十数年前まで「乳授けの本家」として祈願に来る人もあったという。

② 太子堂の針

太子堂の針に関する信仰は早くに絶えたが、その代わりをしたのが、弁財天であった。本坊の南に月無池（単に弁天池ともいう）があり、池中央の島に弁財天を祀る祠があった。「月無^{つきなし}」という意味から月経

無しと解釈し、妊娠を祈願した。また、逆に避妊の祈願もなされた。太子堂の信仰を人づてに聞いた者が堂を訪れたが、すでにその信仰が絶えていた。あてもなく境内を巡っているうちに、「月無池」という名を知り、発想し、祈願をしたところ、御利益があったので、知人等にその話を広めた。こういった感じで信仰が形成されていたのではなからうか。

③ 椎寺薬師堂

かつては、小さな土器^{かわらけ}の中央に穴をあけて、氏名・年令を記して堂の扉に吊すと耳の病が平癒するといわれた。この堂は、戦時中の空襲によって焼失した万灯院のかわりに、戦後になって移築された。もとの薬師堂の信仰が堂が移ることによって、万灯院にもたらされ、十数年前まで、万灯院へ耳の病の祈願に来る人がみられた。

このように、カミ・ホトケの機能は、時代により人々の要求に対応して、変化・付加される。今後も、時代とともに世相が変化するにつれて、カミ・ホトケの機能も変化し、消滅・再生・新生が繰り返されていくであろう。

最後に、『初篇』および「二篇目録」に限定してみてきたが、この二つの資料に記載されていない信仰も数多くみられる。また、「二篇目録」に対する考察も不十分な箇所がみられるであろう。さらに、大阪全般をとらえなければ、都市大阪の呪祭を十分に理解できないであろうが、それらは今後の課題とする。

註

- (1) 『神佛靈驗記圖會』の奥付には、「續ひて京江戸をはじめ諸國の部を追く出版仕候」とある。
 - (2) 筆者は現在、『二篇目録』の再現の作業を継続中である。近々、活字化する予定である。
 - (3) 船絵馬の背景に住吉大社が描かれる。この様式がパターン化されるのは十八世紀の中頃で、十九世紀の中頃まで船絵馬の主流を占める。詳細は、石井謙治著『図説和船史話』（図説日本海事史叢書一）、昭和五十八年、至誠堂。を参照されたい。
 - (4) 本書の書肆田寺与右衛門と同一人。
 - (5) 石井謙治著、『図説和船史話』（図説日本海事史叢書一）、昭和五十八年、至誠堂、二〇七頁。
 - (6) 『塩尻』（天野信景著、天明二年〔一七八二〕成立）十二巻に「疱瘡神が恐れて逃げたという草」と題して、「八丈島に此の草あり。此の草あり。此の島伊豆国より百里ほど未申の方、熊野よりは南なり。昔疱瘡疫神此の島にわたりて、あきたは草を見て恐れて逃去る。故に此の島に疱瘡なし」。さらに、六十一巻にも「此の島昔より痘疹の疾ひある事なし」と記され、それは源為朝の靈威によることも記されている。その関係から、為朝の赤絵が疱瘡除けの護符として江戸市中等に流行した。また、小幡玄二の『痘疹大成集覧』にも、伊豆ノ州ノ東南・海中一島アリ、八丈ト名ヅク。其ノ地ノ居民、上古以来未ダ嘗テ痘症ヲ患ハザルナリ。
- と同様の記述が見られる。
- (7) 西村泰著『住吉大社』、昭和五十一年、学生社、二〇六頁。
 - (8) 野堀正雄、「現代民間信仰の側面——大阪住吉大社奉納小絵馬の悉皆調査を通して——」（『近畿民具』十所収、近畿民具学会）一九八六。
 - (9) 大島建彦、「四天王寺と祈願（一）」（『西郊民俗』百十七所収、西郊民俗談話会）一九八六、七—九頁。
 - (10) 富士川游著『信仰と迷信』、昭和三年、磯部甲陽堂。
 - (11) 生田南水著『四天王寺と大阪』、明治四十三年。
 - (12) 木村博、『床浦大明神』と『妙正大明神』——伊豆における疱瘡資料——（『西郊民俗』百十四所収、西郊民俗談話会、一九八六。

- (13) 綿貫啓一、「妙正大明神について——諸資料の紹介を中心に——」（『房総の石仏』三号所収）、昭和六〇年、房総石造文化財研究会、三八—四四頁。
- (14) 『初篇』には、それぞれ別項目として扱われているが、本項目を理解する上において、同一項目として扱う方が良いと考えられたので、同時に問題にした。
- (15) 大島建彦、前掲書、十頁。
- (16) 武井武雄著『日本郷土玩具（西の部）』、地平社書房、昭和五年、一八頁。
- (17) 尾崎清次著『玩具圖譜』一、（昭和四年、笠原小児保健研究所）、昭和五十七年、村田書店、三二頁。
- (18) 大島建彦、前掲書、十一—二頁。
- (19) 三輪善之助、「大阪天王寺の庚申塔」（『考古学』七—四所収）、昭和十一年。
- (20) 三善貞司編、『大阪史蹟辞典』、昭和六十一年、清文堂、一七九頁。
- (21) 辯咲美志、「庚申こんやく」（『大阪辯』三所収、大阪ことばの會編）、昭和二十六年、清文堂書店、一三四頁。
- (22) 三善貞司、前掲書、一五九頁。
- (23) 大島建彦、「四天王寺と祈願（二）」（『西郊民俗』百十九所収、西郊民俗談話会）、昭和六十二年、二九頁。
- (24) 大島建彦、同書、二九頁。
- (25) 鳥足Ⅱ下駄の台の下に、鉄製の前に三本、後に一本、鳥の足のような棒を付けたもの。
- (26) 大阪における七カ所の墓地を順に供養して廻ることをさす。明治時代中頃まで続けられた。回向の目的は、有縁無縁の一切の精霊の菩提を弔うことにある。一夜に七墓を巡れば、死んで葬式の時に、雨風の心配がないともいふ。七墓は時代や住む地域によっても変遷がみられた。一般的には、梅田・長柄・蒲生・小橋・高津・千日・飛田を数える場合が多いが、近松門左衛門の『賀古教信七墓巡』では、梅田・葎原・蒲生・小橋・高津・千日・飛田の七カ所としている。

（相愛大学 人文学部）

Festivity in the Metropolitan Osaka

NOBORI Masao

To study the festivity in the metropolitan Osaka in regard with popular beliefs, it is one of the best ways to focus on the festivity held by major monasteries in Osaka.

The article thus examines two cases of festivity held by the Sumiyoshi Taisha Shrine and the Shitennoji Temple as they are described in two ancient books: "Jinja Bukkaku Gankake Chohoki Shohen—Manual for Fulfilling Wishes by Praying to Shintoist or Buddhist Deities, the first version" and "Shinbutsu Reigenki Zue Nihen Mokuroku—Catalog of Illustrations of Shintoist and Buddhist Deities with Their Benefits, the second version" authored by Utakuni Hamamatsu. The latter material consists only of a list of shrines or temples with their benefits, and does not describe all the listed examples in full detail. For those missing some necessary elements of description, some "conjecture" must be made.

It is hoped that an aspect of popular beliefs in the metropolitan Osaka will be illuminated through tracing the changes of people's beliefs in the deities enshrined in the two major monasteries.